誌上行学講習会

高佐日煌上人

第九識、判断識

「知覚を支配して生命を運営するものは、第六識の意識である。意識の構成は、覚意識と心意識の二つに区別せられる。覚意識とは、主我が肉体に君臨する、覚醒時に於ける支配活動を言い、心意識とは脳髄の内に装置せられている、心理機構の自動現象を言う。両者の関係を混同しないのが整識である。」

ここでいささかか説明を加えます。我々は誰でも心は一つだと考えていますが、事実は二つであります。それは眼のさめている時の自分の心、つまり主我という心と、その主我に使われている、脳味噌の中に装置され仕込まれている心の二つであります。前者の心を覚意識、後者の心を心意識と呼びます。覚意識とは、眼がさめている時に我が肉体に君臨し支配する心であります。したがって眼のさめない時は肉体を支配しない。ねむっている時は肉体だけあって主我は留守になる。つまり眼がさめていてはっきり自分を意識するのが覚意識であります。心意識の方は、脳髄の中にちゃんと機械のように出来あがっている心のことで、これは自動現象を示します。ひとりでに働く心であります。例えば皆さんが手紙を書くと致します。紙を前に置きぺんを持つ。さてどういうことを書こうかなと考える。これが覚意識。そうすると脳の中にある心が自動現象を起して文句をこしらえてくれる。これが心意識。それを筆の先きで書く。これが覚意識ということになります。心がうまく文句をつくってくれなければ、うまく書くことは出来ないわけであります。どうもこの文章はうまくない。もっといゝ文章はないかというので心の主人公は心（この場合は脳味噌）に命令する。脳味噌の方は主人公にもっと勉強して材料を与えてほしいと要求する。学問が必要なのはその為であります。

（以下次号）

お題目で成仏するⅡ

妙法（根源意識）から分裂した意識は、地上、物質界の全てのものに入り込んでみました。鉱物に入った意識はその静けさと落ち着きをなどを感じました。次には土に入り全てを養い、そして植物の中に入った意識は、その中で成長する感覚を学びました。魚に入った意識は大海で心ゆくまで泳ぎました。そして鳥になった魂は大空を自由に飛翔しました。動物達になった魂は大地を駆け巡り行動しました。そして類人猿に入った魂は、思考し始めその肉体を進化させ人となり根本意識の目的である自己認識を始めるようになったのです。

自己認識とは、他者の認識を踏まえたものであり、宇宙の認識、世界の眞実のありよう、本質の認識を目指すものです。

動物に入り込んだ魂は、その肉体を通して得られる感覚、快感に次第に夢中になっていきます。食べること生殖行為などです。特に生殖行為は、魂達を虜にし、人類が受肉した目的を忘れさせるようになりました。近現代では、パン、スポーツ、セックスというものが人々の生きる目的になってきています。

しかし、本来魂が肉体を持つ目的は、物質世界の体験経験を通し、個の意識を深化、発展させ、地上を浄土にするためでした。

その本来の輪廻転生の目的を人類は忘れ、快感に執着し、性欲とそれに付随する様々な欲望に引きずられ生まれ変わり、様々な罪を重ね業によって生まれ変わり、またそのカルマの解消のため生まれるようになりました。

やがて、本来魂の修行場である地上界は欲望の追求の場と化して弱肉強食の修羅の世界となっていったのです。

現代においても戦場と化している世界は業に引きずられた世界となり、欲望のままに人は行動し、魔が跳梁しているのです。世界は悲しみの満ちあふれた忍土となりました。世界は、縦て掛ける横かける高さ掛ける忍耐の世界になったのです。世界は四苦八苦、生老病死と言う苦しみに満ちた世界になったのです。このようにして、この世界は忍土、娑婆と呼ばれるようになりました。